

グリム童話と日本昔話

—昔話・東西一致の謎—

高木昌史

序

「とうていその伝播の経路が分かりそうもない話に、幾つとなき全世界の一致のあること」（『郷土生活の研究法』一九三五年¹）。

「私どもの驚いておりますことは、「……」二つの遠く離れたものが、かえって互いに似通うていることであります」（『昔話と文学』一九三八年²）。

「今日はまだはつきりと説明し得ないにしても、これは何かよくよくの、まったく我々の知らない原因があるのだ、ということ」（『昔話覚書』一九四三年³）。

一九二三（大正十二）年、国際連盟委任統治委員を辞任した柳田国男は、スイスのジュネーヴから帰国した後、約十年間、滞欧前後に収集した洋書文献を旺盛に読破しながら昔話を集中的に研究し、右のようにその感想を吐露した⁵。

口承文芸の一ジャンルである昔話は、〈伝播の経路〉は不明ながら、世界的な〈一致〉があること、〈遠く離れた〉ものが互いに似ていること、現在の段階では説明不可能だが、それには〈何かよくよくの原因〉があるに違いないこと、昔話を研究しながら、柳田はこのようなことを感じ取っていたのである。

世界各地に伝承されてきた昔話が、類話の糸によって縦横無尽に互いに連携し合い、雄大な相関図を織り成してゆく様には、心をときめかすような何かがある。昔話には地域性（ローカル）と全世界性（グローバル）が交錯する、いわゆるグローカル^{glocal}な性格がある。本稿では、グリム童話と日本昔話を両極に、昔話の世界的な〈一致〉の謎について考えてみることにしたい。〈遠く離れた〉ドイツと日本の昔話が〈互いに似通う〉ている様子を、

〈伝播の経路〉も考慮に入れながら紹介し、一致の〈原因〉を探ることにする。今回は、両国を結ぶ中継地点として、「ユーラシア」Eurasien⁷、すなわち、ヨーロッパ Europa + アジア Asien⁸、中でも、モンゴル民族とトルコ民族に注目した。

一 柳田のグリム研究

日本で初めて、グリム童話と日本昔話の密接な関係に気付いたのは柳田国男であった。その契機となったのは彼のグリム研究である。二度に渡るジュネーヴ滞在時代、柳田はヨーロッパ各地を旅行しながら、民族学・民俗学関係の洋書（英語、独語、仏語）を多数購入したが、その中には有名なボルテ／ポリフカ共著『グリム兄弟の「子供と家庭の童話集」注解』全五巻 J.Bolte/G. Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm, 5Bde. (1913/1915/1918/1930/1932) (B/P 略記⁷) も含まれていた（滞欧中に第一～三巻、帰国後第四、五巻を揃えた）。

今日なお、口承文芸学の最重要文献の一つである B/P 第一巻から第三巻には、グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』（KHMと略記）各話への詳しい注釈と世界規模の類話一覧が収められ、第四巻と第五巻は、全世界の昔話の歴史と研究史を詳細かつ体系的に解説している。柳田文庫所蔵の原書の「昔話の歴史」には特に、無数のアーダーラインが引かれており、柳田の徹底した研究ぶりを窺わせている。柳田はレクラム文庫版の KHM 三巻（出版年不詳）と B/P 五巻を出発点に、昔話の東西比較を構想した（『昔話覚書』⁸）。

柳田が本格的にグリム研究に着手したことによって、わが国の口承文芸学は、結果的に、世界の潮流に繋がることになった。『昔話覚書』の中で彼は指摘する。「グリム兄弟が独逸の片田舎で聴き集めたものの中にも、日本で我々の祖先たちが、楽しみ語っていたのとまず一つと違ってよい話が、五十は安々と拾い上げられると違って

いる人々もある⁹⁾。グリム童話と日本昔話の類似性に柳田はすでに着目していたのである¹⁰⁾。

遠く離れた国や土地に、なぜ似通った話が伝承されているのか。この謎は、様々な地理的・歴史的な伝承経路、そして国際的な文化交流を予想させる。以下、鳥言葉と竜退治の昔話を具体例に、その様子を覗いてみたい。

二 (具体例1) 鳥言葉

二・1 グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』所収の「三つの言葉」Die drei Sprachen (KHM 333) は次のような話である。(要約、以下同じ)

昔、スイスの老伯爵に一人息子がいたが、物覚えが悪いので、評判の先生の許へ送り出した。一年後、帰って来た息子は犬の言葉を習ったと言う。伯爵は失望し、息子を別の都の先生に頼んだ。一年後、息子は鳥の言葉を学んだと報告する。父親は腹を立て、息子を三番目の先生の所へ行かせた。一年後、息子は蛙の言葉を覚えたと答える。烈火のように怒った父親は、息子を森で殺すように家来に命じたが、憐れんだ家来は息子を逃がした。息子がある城へ行くと、人間を喰う山犬たちが塔にいて怖れられていた。若者(息子)は犬の言葉から、彼らが塔の地下室の宝物の番をしていたことを知り、それを外に持ち出すと犬たちは静かになった。その後、若者はローマに行きたくなかったが、途中、沼の蛙の言葉を聞いて憂鬱になった。ローマに到着すると、ちょうど死去した法王の後継者選びが行われていた。教会に入ると、白い鳩が二羽、若者の肩にとまった。神の奇蹟とされ、若者は法王に選ばれた。蛙はその運命を予告していたのだ¹¹⁾。

スイス南西オーバーヴァリス地方の昔話で、グリムの「原注」Originalanmerkungenに拠ると、本話は法王シルヴェストル二世(在位九九九—一〇〇三)およびインノケンティウス三世(在位一一九八—一二二六)に纏わる伝

説に由来している。

二・2 「動物のことは分かる男」(『シベリア民話集』)

昔、男が狩りに行って穴に落ちた。そこに金色の角のある蛇のハン王がいた。男は三年間、穴で過ごした後、蛇の背に乗って外に出たが、蛇の角の欠片を手にした瞬間、蛇の言葉が分かった。蛇は男に、お前は動物の言葉が理解できるようになるが、誰にもそれを話してはならない、と忠告した。男が帰宅し、夜、ねずみの会話を耳にしたとき、可笑しくて笑った。馬鹿にされたと思った妻が怒って問い詰めたので、男は秘密を漏らした。その途端、彼は動物の言葉が分からなくなった。⁽¹³⁾

バイカル湖周辺に住むブリヤード族に伝わる昔話で、この民族は言語的にモンゴル語族に属している。⁽¹⁴⁾

二・3 「動物言葉の護符」(『トルコの民話』)

夕方、農夫が仕事から帰る途中、道端の藪で一匹の蛇が苦しんでいた。茨の棘にひっかかっていたのだ。農夫は蛇を木に絡ませ棘を抜いてやった。救われた瞬間、蛇は美しい乙女に変身しお礼がしたいと言った。彼女は蛇の大王(パティシヤ)の娘だった。乙女は農夫を父王の許に連れて行き、大王に何が欲しいか訊かれたら、鳥と獣の言葉が分かる護符と答えるように忠告した。大王は人に秘密が知られたら死ぬと男に言った。宮殿を去った農夫が、途中、疲れて木陰で休んでいると、二羽の鴉が会話をしていた。この愚かな男(農夫)は宝の上に座っているのに気付いていない、と。農夫が鋏で掘ると、金の詰まった甕が出てきた。袋に金を入れ農夫は帰宅し、各種の動物を買い、馬たちの会話から妻の妊娠を知って思わず笑った。妻が理由を問い質したが、夫は答えず、杖で叩いて黙らせた。妻は従順になり、子供が生まれ、夫婦は幸せに暮らした。⁽¹⁵⁾

文中の大王（パディシヤ）Padisshahはイスラムの元首を意味する。ちなみに、東トルキスタンの中、カラ・ハーン朝のトルコ族は、十世紀半ば、西方から伝来したイスラムに改宗し、トルコ族最初のイスラム王朝となっている。¹⁶

二・４ 「鳥や獣の言葉が分かる人々」〔中国の神話伝説〕

中国の古文獻によれば、春秋時代（紀元前七七〇―四〇三）には牛の言葉、後漢時代（紀元後二五―二二〇）に馬の言葉、三国時代（同二二〇―二八〇）に鳥の言葉、唐代（同六一―九〇七）にも鳥の言葉を理解した人の話が伝えられている。中でも、孔子の高弟、公冶長は鳥の言葉が分かる奇妙な特技で有名だった。ある時、彼は雀の会話から斉人が攻めてくることを知り、人々は敵を撃退し国土を守ることが出来た。¹⁷

二・５・１ 「聴耳頭巾」〔石手県〕

奥州のある在所に貧しい爺がいた。氏神の稲荷様は善良な爺に宝頭巾を与えた。被ると鳥や獣の言葉が分かる頭巾だった。爺が路傍の大樹の下で居眠りしていると、浜と国中から一羽ずつ鴉が飛んで来て、枝に止まって会話を始めた。爺は早速、聴耳頭巾を被った。浜の村の長者が土蔵を建てて五、六年になるが、屋根に蛇が釘で打ち付けられて半死半生になっている。長者の娘の永患いはそれが原因だ。こう話して鴉たちは飛び去った。爺が長者の家に行き、蛇を助けると、娘の病気は回復した。長者はお礼に三百両を爺にあげた。爺は氏神様のお宮を建て直した。〔以下略〕¹⁸

二・５・２ 「聞き耳」〔くのつ〕（熊本県）

昔、鏡研ぎ師が浜辺を歩いていると、大きな亀を苛めている者がいた。研ぎ師は亀を買い取り海へ逃がしてやった。ある日、山道を行くと、大男が来て、竜宮の殿様のお妃を救ったお礼だと言って、研ぎ師を背中に負って御殿へ向かった。大男は、土産にはくのつという鳥をもらうように忠告した。ふたたび大男の背中に乗って帰宅した研ぎ師は、くのつを耳に当て木の上の鴉たちの会話を聴き、殿様の病が、柱の下の蛙と蛇が原因であることを知って、殿様の病気を治し、殿様の後継ぎになった。¹⁹⁾

二・五・一「聴耳頭巾」は、柳田国男編『日本の昔話』(昭和五年初版、同三五年改訂)収録の東北地方の昔話、二・五・二「聞き耳」(くのつ)は、稲田浩二編『日本の昔話』(上)所収の九州地方のものである。熊本の話は、冒頭が浦島太郎タイプになっている点が特徴的で、後半は岩手の話と殆ど同じである。

最後に、鳥言葉のモチーフを含むヨーロッパの古い伝承、古代北欧歌謡集『エッタ』Eddaの一篇を紹介する。

二・六 「ファーヴニルの歌」

英雄シグルズは養父で鍛冶屋のレギンに唆され、黄金を守っている大蛇ファーヴニル(レギンの兄)の心臓を、道に開けた穴の中から剣で刺し貫く。瀕死のファーヴニル(輝く竜)は、宝は命取りになる、と予言して死ぬ。隠れていたレギンが現れ、大蛇の心臓を火で炙ってくれとシグルズに頼む。木の枝に刺して心臓を炙っていたシグルズが、焼けたかどうか指でつまんで試すと火傷し、指を口の中に入れた。心臓の血が彼の舌に触れた瞬間、彼は鳥の言葉が分かるようになる。^{四十雀たち}四十雀たちの会話から、レギンがシグルズを毘にかげようとしていること、レギンの首を刎ねれば、黄金が手に入ることを知る。シグルズは先手を打ち、剣でレギンの首を刎ね、ファーヴニルの棲みかである莫大な黄金を見つける。それを箱に詰めて馬の背中に積み、彼は立ち去る。²⁰⁾

シングルスはドイツ中世の英雄叙事詩『ニーベルングンの歌』の中のジークフリートの原像とも言うべき英雄である。²¹⁾グリム童話「三つの言葉」(KHM三三)あるいは「白い蛇」(KHM一七)に見られる「動物(鳥)の言葉が分かる」モテーフがすでにここに窺われる点が目玉される。「ファーヴニルの歌」は、十世紀にノルウェーあるいはアイスランドで成立した作品と言われる。²²⁾

以上、二・1から二・6に見るように、「鳥言葉の昔話」は、ユーラシア大陸の東は中国から西はヨーロッパ(イス/北欧)まで、また大陸から海を隔てて、東は日本、西はアイスランドまで、広く伝承されているタイプである。

二・7 (解説) 鳥言葉の昔話

鳥言葉のモテーフについて、柳田国男は今日なお比較民話の模範とすべき名論文を残した。昭和十二(一九三七)年六月十四日に放送され、翌年『昔話と文学』(一九三八年刊)に収録された「鳥言葉の昔話」²³⁾がそれである。全七章の同論考の中で柳田は、初めに、互いによく似た昔話が「偶然に無関係に生れたということ、想像しがたい」(第一章)と前置きし、「驚くべき昔話の世界的一致」は、現在のところ、「片端」、つまりインドからヨーロッパまでの西側のみ原因が明らかになっているに過ぎず、インドから東は未開拓で、日本が寄与すべき点はそのにあると語る。

続いて彼はこのテーマの先行論文として、世界的に有名な三人の学者、ドイツの碩学テオドア・ベンファイ(一八〇九—一八八一)の『動物言葉の昔話』、イギリスの民族学者ジェイムス・フレイザー(一八五四—一九四二)の『動物の言葉』、そしてフィンランドの民俗学者アンティ・アールネ(一八六七—一九二五)の『動物の言葉の解

る男と聴きたがる女房』を紹介する(第二章)。ペンファイはインドの説話集『パンチャントラ』の独語訳で知られるサンスクリット学者で、世界の昔話のインド起源説を唱えた、いわゆる移動理論 Wandertheorie の代表者である²⁴⁾。名著『金枝篇』で有名なフレイザーも動物の言葉に関心を寄せ、また『昔話のタイプ』を刊行したアールネは、動物の言葉が分かる秘密を人に伝えると命を失うにも拘わらず、動物たちの会話を聞いて思わず笑ったために、理由を女房に問い詰められる男の話を論じている。柳田はこのタイプを(「複雑型」と呼び、それが西ヨーロッパと日本に普及しなかった事実)に読者の注意を喚起する(第三章)。

これに対して、日本の「聴耳」では、動物の言葉が分かって得をした、あるいは人助けが出来た、といった(「単純型」)が支配的で、グリム童話の「三つの言葉」もこのタイプに近く、「二つの遠く離れたものが、かえって互いによく似通っている」例がそこに見られる。

ユーラシア大陸の東に海を隔てて浮かぶ日本列島が、同大陸西端の国ドイツとよく似た鳥言葉の昔話を共有していることを確認した柳田は、日本の中でも喜界島や奄美大島の「聴耳」タイプが、海の底の都である南西諸島のネリヤ(ニルヤ/ニライカナイ)と連繫している点に、島国日本の「鳥言葉」の特色を探る(第四・第五章)。すなわち、動物の言葉が分かる宝頭巾は、わが国の伝承においては、他界からの贈り物なのである。

柳田はグリム童話「三つの言葉」(KHM三三)の粗筋を紹介しているが(第六章)、彼の論考を補足する意味で、ここでグリムの右の物語について少し詳しく触れておきたい。

フロイト派の心理学者ブルーノ・ベッテルハイムは「三つの言葉」に登場する三種の動物に着目する(『昔話の魔力』²⁵⁾)。犬と鳥と蛙は、換言すると、大地、空、水に生きる哺乳類、鳥類、両生類である。三種の動物は、要するに、三つの自然界の存在を代表している。と同時に、生物進化論的に、原始から高等まで三段階を示している。従って、三つの言葉を習得した伯爵の息子は、馬鹿者どころか、観点を変えれば、逆に、自然界の奥義に通じた知恵者である。ベッテルハイムは昔話の中の犬を「自我」ego、自我をチェックする鳥を「超自我」

super-ego、蛙を原初的な衝動である「イド」id(英語)に置き替え、これら三要素の有機的な関係から人間の発達がはじめて可能になるとする。⁽²⁶⁾ 物語の主人公は三つの言葉の習得から(パーソナリティの統合)を学び取ったのである。

ところで、アールネ／トンプソンの『昔話のタイプ』と最近のウター編『国際的昔話のタイプ』では、「三つの言葉」はAT/ATU六七―The Three Languagesに分類されている。⁽²⁷⁾ またそれとは別にAT六七〇「動物の言葉」The Animal LanguagesおよびATU六七〇「動物の言葉が分かる男」The Man Who Understands Animal Languagesのタイプが設定されている。⁽²⁸⁾ その中、AT六七〇は、1「蛇の贈り物」、2「好奇心の強い妻」、3「雄鶏の演説」をその構成要素として掲げる。本稿第二章で紹介したシベリア(ブリヤート族)民話「動物のことが分かる男」(二・二)とトルコ民話「動物言葉の護符」(二・三)はその典型例で、前者は1と2の要素、後者は1と2と3すべての要素を具備している。中央アジアに広く居住するモンゴル民族(ブリヤート族を含む)とトルコ民族に「好奇心の強い妻」が共通している点に、地域性や民族性が反映しているのかも知れない。グリム童話にも日本の「聴耳」にもそれが欠如しているのは、柳田の指摘する通り(第七章)、対照的である。「鳥言葉」に関して付言すると、鴉が関与した物語が、洋の東西を問わず多いのが注目される(前記トルコ/日本)。鴉が賢い鳥であることはよく知られており、⁽²⁹⁾ 例えば、北欧神話の主神オーディンはフギン(思考)とムニン(記憶)という名の二羽の鴉から世の中の情報を収集する。⁽³⁰⁾ グリム童話「忠臣ヨハネス」(KHM六)や「二人の旅職人」(KHM一〇七)、また日本の「聴耳」の中で、主人公は鴉の会話から重要なニュースを入手している。鴉ばかりではなく、雀(中国の伝承)や四十雀(『エッダ』「ファーヴニルの歌」)等が貴重な報せを伝えてくれる例もあるが、いずれにしても、動物(鳥)と人間との関わりは、一般的に、奥が深く、これに纏わる民間伝承の一端を、我々は様々な国の昔話から窺い知ることが出来るのである。

三 (具体例2) 竜退治

三・1 「二人兄弟」(KHM六〇)

グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』所収の「二人兄弟」Die zwei Brüderの粗筋は次の通りである。

昔、金持ちの金細工師の兄と貧しい箒作りの弟がいた。弟には二人の息子がいたが、邪悪な兄(伯父)によつて、森に置き去りにされた。狩人が二人を見つけて育て、狩りを学ばせた。修業の旅に出た二人兄弟は、途中、兎、狐、狼、熊、獅子を仲間にした。その後、弟は黒い紗の布を張った都へ行つた。姫が山の上の竜(ドラゴン)の人身御供になると言う。翌朝、狩人(弟)が竜の山に登ると、小さな教会があつた。祭壇の杯を飲み干す者は力強き者、地中の剣を用いよ、と立て札に書かれていた。狩人は行動を開始し、姫を教会に入れ、仲間の動物に加勢されながら、七つの頭の竜と戦い、それを退治し、証拠として竜の舌を切り取つた。疲れて寝ている間に、悪い侍従長が狩人の首を切り、竜の頭を袋に入れ、姫を抱いて山を下り、竜退治の功績を自称し、姫を脅迫して一年後の彼女との結婚を取り決めた。殺された狩人は、仲間の兎が採つて来た草の根で生き返つた。都に赤い幕が張られ、侍従長と姫の婚礼が準備されたが、動物たちの助力で、姫は狩人が生きていることを知つた。王様の前に竜の頭が並べられ、侍従長が姫の婿と告げられたとき、狩人が現れた。竜の舌はどこかと彼は問い、包みから舌を取り出した。狩人は事の次第を王様に報告し、侍従長は牡牛四頭に引き裂かれ、姫は狩人と結婚した。そして狩人は王国を継いだ。「以下略」。

KHMの中でも最長篇の「二人兄弟」には様々なモチーフが織り込まれているが、ここでは、小さな教会、

祭壇、といったキリスト教的要素と、人身御供を救うための英雄と竜との戦いという異教的要素が、物語の核心部を構成している。

三・二 「雲から落ちた刺繡靴―大蛇の穴から救われた王女」〔中国民話集〕

乞食と独身者が仲良くなり義兄弟になった。二人が山へ薪を採りに行くと、旋風が吹き、黒い妖怪が風の中で赤い服の女を担いでいた。二人が斧を投げると、刺繡をした靴が落ち、妖怪の血が滴った。布告が出た、皇帝の娘が大風に攫われた、娘を捜し出した者には金銀、役職そして娘を与える、と。乞食と独身者が名乗り出、山の上の血の跡を辿った。谷間の家の爺と婆が、今夜、男の子が九頭の大蛇に捧げられると言って泣いた。風が吹き、独身者が斧を振り下ろすと、妖怪が血を流して消えた。追うと、荒れた山に洞穴があった。乞食は独身者を下に下ろした。地下では、王女が泉の水で妖怪の血のついた服を洗っていた。妖怪は、頭を切り落として身体を切り刻めば死ぬと、王女が独身者に教えた。彼は妖怪を退治した。王女は金の腕輪を二つに割って、一つを独身者に他の一つを自分のものとした。合図で乞食が縄を引き上げると、王女があまりに美しかったので気が変わり、彼は洞穴に石を投げて立ち去った。洞穴には白い竜が鎖に繋がれていた。竜王の息子で、九頭の大蛇によって地獄に入れられていたのだ。独身者が鎖を切ると、王子は九頭の大蛇を火で焼いて灰にし、独身者を背中に乗せ洞穴から脱出した。竜王は喜び、独身者を竜宮に引きとめた。一方、乞食は王女を連れて宮殿に行ったが、嘘に気付かれ追放された。独身者が宮殿に向かうと王女が喜び、彼は証拠の金の腕輪を皇帝に示して王女の夫となった。⁽²⁰⁾

中国の内モンゴル自治区の昔話で、グリム童話の「二人兄弟」同様、長篇の物語である。旋風の中の妖怪が赤い服の王女を攫う様子は幻想的で、洞穴の上（乞食）と下（独身者）、悪と善の対比が鮮やかである。

三・3 「エメラルドの不死鳥の物語」(『トルコ民話集』)

皇帝の庭園に林檎の木があった。毎年、三つの実をならせたが、真夜中に七頭の魔神がそれを取ってしまった。皇帝の三人の息子が魔神を退治しようと、先ず長兄が見張ったが恐怖のために失敗、次兄も同じで、三男の番になった。彼はコーランを懐に入れて庭園に行き、七頭の魔神(竜)の頭に矢を放って命中させた。しかし竜は逃げ去った。三人の皇子が竜の跡を追った。竜が隠れた井戸の底には美しい姫が三人いた。末の皇子が竜の首を刎ね、二人の兄が三人の姫を井戸から引き上げたが、弟を井戸に落として父帝の許へ向かった。地下の国では、水を得るために、毎年、竜に娘を一人捧げていた。明日は皇帝の娘が人身御供になる。地下の皇子は姫の前に立ち、七頭の竜の口に矢を放った。竜は死に、その後、皇子は父帝の許へ帰り、先の三番目の姫と結婚した。³³⁾

文中、皇帝は「パディシャ」Padischahで、前述のように、昔のイスラムの元首を意味する。また魔神Devは、元は、ペルシアの民族宗教の神々を指したが、ゾロアスター教ではデーモンを意味したようだ。魔神は、³⁴⁾ここでは、竜「ドラゴン」である。

三・4 「大蛇を退治した娘」(『搜神記』)

福建省の庸嶺山の西北に洞穴があった。長さ七、八丈「一丈〓約三メートル」の大蛇が棲み、土地の住民が怖れていた。彼らは牛や羊を犠牲に捧げていたが、今度は十二、三歳の少女を食べたいと大蛇が要求した。人々は奴隷の娘や罪人の娘を祭日(八月一日)に捧げたが、十年目に、娘が六人いる家の末娘が自ら犠牲の募集に応じた。人身御供として自分を売りお金を両親にあげるつもりだったが、両親は許さなかった。娘は

こっそり役人に剣と蛇を咬む犬を請うた。洞穴の近くに米団子を置き、大蛇が食べている間に、犬が蛇に咬み付き、娘は剣で切り付け、大蛇は遂に死んだ。越王は彼女を妃とし、父親を知事に任じた。彼女を称える民謡が今も歌われている。⁽³⁵⁾

台湾の対岸、中国の福建省の昔話である。大蛇あるいは竜退治の物語は、一般に、男性の英雄が活躍するが、ここでは珍しく少女が主人公で、彼女は自分の意志で怪物に立ち向かい、知恵と勇氣によってこれを退治する。

三・五 「八岐大蛇」〔古事記〕上巻

高天原^{たかまがはら}から出雲の国へ降り立った須佐之男命が、肥河の鳥髪で箸が流れてきたのを見た。川上を探すと、八岐大蛇に毎年一人ずつ食われたと言う。爺は国の神で娘の名は櫛名田比売といった。理由を訊ねると、娘八人が八つの峰にわたる大蛇だった。須佐之男命は娘を妻に請い、娘を瓜形の櫛に変えて御角髪^{みすみずら}に刺し、爺と婆に濃い酒を造らせた。垣をめぐらし、八つの門に八つの棧敷、棧敷に濃い酒の入った酒槽^{さか}を準備した。大蛇が酒を飲み眠ると須佐之男命は十拳剣^{とつかのけん}でそれを斬った。肥河は真っ赤に染まり、命は出雲に新居を構えた。⁽³⁶⁾

有名な八岐大蛇退治の物語である。注釈書によると、⁽³⁷⁾それは蛇体の水神で、具体的には、島根県の斐伊川の水霊である。川は鳥取県との境の船通山を源とし、西北に進み、宍道湖に注ぐ。八頭の竜は、大小の支流を合わせて流れる大河の比喩とも言われる。

最後に、ゲルマン神話の中の竜退治に関しては、前記『エッタ』『ファーヴニルの歌』(二・6)にその祖形を見ることが出来る。粗筋は先に紹介した通りだが、シグルズ伝説の主眼は、大蛇が守る宝物の獲得で、姫の救出

ではない。後者のタイプは『エッダ』でも『ニーベルンゲンの歌』でもなく、ドイツの民衆本『不死身のジークフリート』に窺うことが出来る⁽³⁸⁾。

三・6 (解説) 竜退治の昔話

アールネ／トンブソンが話型 A T 三〇〇 に分類した「竜退治」The Dragon-Slayer は、A T 五二〇「シンデレラ」Cinderella と並ぶ圧倒的な人気を誇る物語タイプである。ドイツの口承文芸学者クルト・ランケは A T 三〇三「二人兄弟」The Twins or Blood-Brothers と A T 三〇〇の類話一〇〇〇余りを分析したが、それは類話九〇〇余りを数える「シンデレラ」さえ凌いでいる⁽³⁹⁾。

ギリシア語〈ドラコーン〉drakon を語源とする〈竜〉(ドラゴン)は、古代の神話の中ですでに大きな役割を果たしている。インド最古の文獻『リグ・ヴェーダ賛歌』では、主神インドドラが水を塞き止める悪竜ヴリトラを金剛杵を投じて殺す武勲が歌われ、ギリシア神話においては、太陽神アポロンがデルフォイに棲む大蛇ピュトンを殺し、英雄ヘラクレスはレルネーの沼の九頭の水蛇(ヒュドラ)を退治し、また英雄ペルセウスは人身御供として海辺の岩に鎖で繋がれていたエテイオピア王の姫アンドロメダを怪物から救出した⁽⁴⁰⁾。北欧神話の主神トールは恐ろしいミズガルズ蛇を、英雄シグルズ(ゲルマン神話のジークフリート)は大蛇ファアールヴニルを退治した。日本神話の中でも、須佐之男命が八岐大蛇を退治して櫛名田比売を救っている(『古事記』上巻)。

キリスト教が広まった後のヨーロッパでは、竜は悪の象徴として大きな存在となった(『新約聖書』「ヨハネ黙示録」⁽⁴¹⁾)。そして中世には、カッパドキア出身のローマの騎士ゲオルギウスの竜退治がウオラギネの『黄金伝説』によって急速に普及した⁽⁴²⁾。

「竜退治」は多くの場合、英雄による王女の救出をテーマとするため、昔話研究においては特に〈アンドロメダ型〉の名称が用いられる⁽⁴³⁾。グリム童話「二人兄弟」(KHM 六〇)(三・一)はまさしくこのタイプに属しており、

キリスト教国以外の昔話においても、「雲から落ちた刺繡靴」(内モンゴル)(三・二)や「エメラルドの不死鳥の物語」(トルコ)(三・三)はその例を示している。

以上に比べると、中国の『搜神記』の「大蛇を退治した娘」は、主人公が男性の英雄ではなく乙女である点が一風変わっている。また竜の好物(蜜をかけた米団子)を準備する工夫は、『古事記』(濃い酒)との共通性を感じさせて興味深い⁽⁴⁷⁾。

英雄による王女の救出を描く(アンドロメダ型)が、一般に、人々の共感を呼びやすいタイプであることは容易に想像されるが、宗教学者ミルチャ・エリアーデ(一九〇七―八六)は、インドの『リグ・ヴェーダ』に関連して、竜退治の物語をこう解釈する。インドラ神による悪竜ヴリトラ退治には、あらわでないもの、形なきもの、すなわち原初のカオス(混沌)を制御して、天地創造を成し遂げた太古の記憶が刻まれている、と(『永遠帰帰の神話』⁽⁴⁸⁾)。竜(＝大蛇)は、他方、作物や家畜や土地を荒らす自然の猛威(河川、雷光等)のイメージと二重写しにもなる。『古事記』の八岐大蛇退治はその例で、ヘラクレスによる水蛇ヒュドラー退治も同類かも知れない。また、大地ガイアの託宣所の番をしていたピュトン(竜)を退治してパルナツソス山麓のデルフォイに神託所を開いたアポロンの物語は、土着＝竜と外来＝英雄との戦いの比喩としても解釈できる⁽⁴⁹⁾。さらに竜退治に関しては、深層心理学的な解釈も行われている。それによれば、ドラゴンは、人間(子供)がその成長過程で対峙しなければならぬ敵対的な諸力、例えば、圧倒的な父親のイマージを具象化したもので、人は物語を媒介にして、ドラゴン(＝父親)殺しを、良心の呵責を感じることなく、享受し内面化して、己の成長の糧とすることが出来る⁽⁵⁰⁾。

最後に、わが国の場合、大陸から伝来した竜伝説は、台風、洪水、稲作等の風土的な条件と絡み合って、雷神、海神、要するに、水の神の性格を帯びたと言われる⁽⁵¹⁾。昔話における怪物は、日本では、竜よりは、主として猿(神)であり、その退治譚が各地に伝承されている⁽⁵²⁾。その中であって、岩手県の大蛇退治の昔話は、珍しく(ヘアンドロメダ型)を示しているが、その結末には日本的な宗教観が色濃く反映している。

(要約) ある侍が山を歩いていると、箸が流れてくる。川上の村の家で、爺と婆が泣いている。聴くと、七人の娘がいたが、毎年六月十五日に、畑を荒らす大蛇の人身御供に一人ずつ捧げ、明日は最後の娘の番だと言う。頭が八つある大蛇を退治するために、侍は酒を準備してもらい、娘が入る箱に彼が入って、酔った大蛇の頭を刀で斬る。しかし大蛇は死なず、娘が長刀で斬っても駄目である。そこで侍は、祭りの時、権現様にして一番先にお供えをするから命をくれ、と蛇に懇願する。大蛇は遂に殺される。⁵³⁾

明らかに『古事記』の「八岐大蛇」直系の物語である。但し、侍は、須佐之男命のように、大蛇を退治することとは出来ず、権現様にして祀る約束をすることで大蛇に死んでもらう。本地垂迹説によると、日本の神々は、仏が衆生を救うために権現として出現したものとされる。⁵⁴⁾ 右の場合、大蛇はその「権現」＝神＝竜神に祀り上げられたのである。

四 東西一致の謎―多元発生説と移動説―

以上、具体例1「鳥言葉」と具体例2「竜退治」を読んできた。前者は、西から順に、アイスランド(『エッダ』)、スイス(グリム童話)、トルコ、シベリア(ブリヤート族)、中国そして日本、後者は、アイスランド、ドイツ、トルコ、内モンゴル、中国、日本を採り上げた。ちなみに、ブリヤート族はモンゴル語族に属している。

ところで、「鳥言葉」にしろ「竜退治」にしろ、何故にこれほど類似した物語が互いに関わり離れた地域に存在しているのか。口承文芸学では、従来、その理由を説明するために、様々な見解が発表された。それらは大きく、「多元発生」Polygenese説と「移動説」Wandertheorieに分けられる。前者は主に、十九世紀の後半、イギリス

のA・ラング、E・B・タイラー、そして人類学派が唱えた理論だが、実は、すでにヴィルヘルム・グリムは『子供と家庭の童話集』『原注』の「文献」に次のように記している。

「おのずから現れ出る思想が存在するように、非常に単純で自然なため、至る所で繰り返される状況というものがある。それ故、まったく異なった国々で、同一の、あるいは類似した昔話が、互いに関係なく生まれることもあり得たのである」⁽⁵⁶⁾。

グリムは昔話の一致の理由を「共通の根本思想」der gemeinsame Grundgedankeに探るのだが、要するに、似たような状況下に、類似の物語が互いに関係なく自然に発生するというのが「多元発生説」である。これに対して、昔話には生まれ故郷があり、それは地域内で、また国境を越えて国際的に、久しい時間をかけて移動し伝播する、とするのが「移動説」である。ドイツのサンスクリット学者テオドア・ベンファイが提起した理論で、インドの説話集『パンチャタントラ』を独語訳した彼は、インドに生まれた昔話が西と東へ移動しながら、世界中に広く伝承されたと説く。これは民族大移動と密接に結び付いた理論で、フィンランド学派の「地理的・歴史的方法」もこれに基づく。⁽⁵⁸⁾

ヴィルヘルム・グリムの多元発生説の根拠となる「共通の根本思想」は、現在、振り返ると、スイスの深層心理学者カール・グスタフ・ユング（一八七五—一九六二）の「集合的無意識」das kollektive Unbewussteの概念に通底する内容を持っている。ユングは個人的な無意識のさらに深層に「集合的無意識」が潜むと想定したのだ（『集合的無意識の概念』一九三六年⁽⁶⁰⁾）、この概念は昔話の「全世界的な一致」の謎を説明する上に有力な示唆を与えてくれると思われる。ちなみに、柳田国男はユングのことは知らなかったものの、ユングの先駆者であるドイツの心理学者ヴィルヘルム・ヴントの『民族心理学原理』（一九一六年）やフランスの社会学者レヴィ・ブルジョールの『原始心性』（一九二三年）等を研究して、「フォオクローアの無意識なる伝承」（『口承文芸史考』一九四七年）あるいは「民族心理の痕」（『妹の力』一九四〇年）といった心理学的要因を考慮に入れた民俗学を構想していた。⁽⁶¹⁾

一方、移動説に関しても、ヴィルヘルム・グリムは重要な見解を発表している。初期の論文「古代ドイツ文学の成立とその北欧文学との関係について」⁽⁸³⁾Über die Entstehung der altdeutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der nordischen (一八〇八年)の中で彼はこう語る。

「アジアから発し、ロシアとプロイセンを通り、バルト海沿岸に達し、それからユトランドとシエランを通過して、その(北欧)民族は北方の国、小人たちがとほうもない宝を山の中で守り、龍が黄金の上に横たわって、それを保護している国へやってきた。神話に深く根付いていて、多様な形態をとる、北欧の富についてのこの信仰が、ふたたび現れることを考えると、富の神が住んでいる、ふしぎな山メルについてのインド人の伝説が、スカンジナヴィアへ行き先をむけた、とシュレーゲルが報告しているのも、ありえないことではない」⁽⁸⁴⁾。

ヴィルヘルム・グリムが右の論文を発表した一八〇八年、ドイツ・ロマン派の批評家フリードリヒ・シュレーゲル(一七七二—一八二九)は彼のサンスクリット学の集大成『インド人の言語と知恵について』⁽⁸⁵⁾Über die Sprache und Weisheit der Indierを刊行した。それは十八世紀末以来、ヨーロッパで隆盛となった古代インドのサンスクリット語学・文学研究の記念碑的な成果の一つで、先述ベンファイの『パンチャタントラ』独語訳と同様、移動説の根拠となった。ヴィルヘルム・グリムも、それに触発されて、昔話の移動に注目した。引用文中、「メル山」Berg Meruはインドの神々が住む山で、世界の中心に位置するとされる⁽⁸⁶⁾。シュレーゲルは「富の神」がインドからスカンジナビアに至った(移動した)経路を、トルキスタンからカスピ海沿岸、そしてコーカサスの北側に想定した⁽⁸⁷⁾。ヴィルヘルムはそれを「ありえないことではない」とする。

インドヨーロッパ語族の研究が本格化した状況の中で、ヴィルヘルム・グリムは、以上のように、「多元発生説」と「移動説」双方の可能性を視野に入れて、昔話が伝承されてゆく様態を柔軟に考える。その姿勢は、今日も、模範とすべきものではあるまいか。

結語

グリム童話と日本昔話、換言すれば、遠く離れた西洋と東洋は、ユーラシア大陸の諸民族、とりわけモンゴル民族とトルコ民族、それに中国を媒介にすることによって、予想以上に互いの関係が深いことが分かる。民族の移動とともに、口承文芸もまた発祥地から遠い異国に移植され、鳥言葉や竜退治等、様々なモチーフを含む物語が他郷の地へ伝承されていった。フリードリヒ・シュレーゲルやグリム兄弟は、インドヨーロッパ語族の比較研究の延長線上に、昔話の東から西への移動経路について語ったが、柳田が指摘するように、特に我々日本人は、視線を東へ向けることで、東西交流の視界をさらに拡大することが出来る。中でも、シベリア、モンゴル、中国、朝鮮半島のルートを捉え直すことによって、昔話研究は確実にグローバルなものになってゆくと思われる。その場合、本稿で見たように、遙かな島国アイスランドと日本は、その間に横たわる広大無辺なユーラシア大陸の距離を、意外にも、瞬く間に縮めてくれる。口承文芸学の醍醐味の一つはそこにある。

註

- (1) 『郷土生活の研究法』（『柳田国男全集』、ちくま文庫版、以下同）、28、一九九〇年、八四―八五頁
- (2) 『昔話と文学』、同、四三七―四三八頁
- (3) 『昔話覚書』、同、四六一頁
- (4) 田中藤司「柳田文庫所蔵読了日記洋書目録・略年表」（『民俗学研究所紀要』第二十二集別冊、成城大学民俗学研究所、一九九八年三月所収）
- (5) 『柳田国男とヨーロッパ―口承文芸の東西―』高木昌史編、三交社、二〇〇六年

- (6) 増補改訂『柳田文庫蔵書目録』成城大学民俗学研究所、二〇〇三年三月
- (7) J.Bolte/G.Polivka:Anmerkungen zu den >Kinder- und Hausmärchen< der Brüder Grimm, Diederichs Verlag, Leipzig, Bd.1, 1913/Bd.2, 1915/Bd.3, 1918/Bd.4, 1930/Bd.5, 1932.
- (8) 『昔話覚書』「改版序」一九五七年、註(3)、『四五四頁
- (9) 註(3)、『四六一頁
- (10) 高木昌史「柳田国男とグリム学」(『現代思想』絵特集「柳田国男」『遠野物語』以前／以後、青土社、二〇一二年十月臨時増刊号所収)
- (11) Reclam, Kinder-und Hausmärchen(KHM), Bd.1, S.186-188. (Die drei Sprachen)
- (12) Reclam, KHM, Bd.3, S.63-64.
- (13) 『シベリア民話集』齊藤君子編訳、岩波文庫、一九八九(初版一九八八)年、一九四—一九七頁
- (14) 同書、一九二頁
- (15) Türkische Märchen, Hrsg. und übertragen von Otto Spies, Eugen Diederichs Verlag, München, 1967, S.237-240. (Talisman der Tiersprache)
- (16) 『平凡社大百科事典』第十卷、一九八五年、一〇八二—一〇八三頁(トルコ族)
- (17) 『中国の神話伝説』上下、袁珂著、鈴木博訳、青土社、一九九三年
- (18) 『日本の昔話』(『柳田国男全集』25、一九九〇年)、一一四—一一九頁
- (19) 『日本の昔話』上、稲田浩二編、ちくま学芸文庫、一九九九年、一四二—一四四頁
- (20) 『エッター古代北欧歌謡集』谷口幸男訳、新潮社、昭和五一(四八)年、一三八—一四三頁
- (21) Reclams Lexikon der germanischen Mythologie und Heldensage, Von Arnulf Krause, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2010, S. 254-257. (Sigurd)
- (22) 註(20)、『二九六頁
- (23) 『鳥言葉の昔話』(『昔話と文学』前掲書)、『四三〇—四四〇頁

- (24) Enzyklopädie des Märchens (EM), Bd.2, Hrsg. von Kurt Ranke, Walter de Gruyter, Berlin, New York, 1979, S.102-109. (Benfey, Theodor)/EM, Bd.14, 2014, S.486-490. (Wandtherorie)
- (25) 『昔話の魔力』ブルーン・ベッテルハイム、波多野完治・乾侑美子訳、評論社、昭和五九（五三）年、一三七—一四三頁
- (26) 同書、一四—一四三頁
- (27) A.Aarne/S. Thompson: The Types of the Folktales (AT), p.234-235./Hans-Jörg Uther: The Types of International Folktales (ATU), Part1, p.367.
- (28) AT, p.233-234/ATU, p.365-366.
- (29) Wörterbuch der deutschen Volkskunde, Oswald A. Erich und Richard Beitz, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1974, S.658-659. (Rabe)
- (20) Reclams Lexikon der germanischen Mythologie und Heldensage, S.145. (Huginn)/S.185. (Muninn)
- (31) Reclam, KHM, Bd.1, S.312-334. (Die zwei Brüder)
- (32) 『中国民話集』飯倉照平編訳、岩波文庫、一九九三年、二五八—二七五頁
- (33) Türkische Märchen, S.29-47. (Die Geschichte vom Smaragd-Prönix) \ 『世界の民話』8 (中近東)、小澤俊夫編、鈴木満訳、ギョウゼウ、昭和六二（五二）年、「エメラルドの不死鳥の物語」一四—一六三頁
- (34) div-Brockhaus-Lexikon, Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1982, Bd.13, S.293. (Padischah)/Bd.4, S.154. (Dev)
- (35) 『搜神記』千宝、竹田晃訳、平凡社、二〇〇〇年、五六九—五七二頁
- (36) 『古事記』(上) 全訳注、次田真幸、講談社学術文庫、一九九八（七七）年、九七—一〇五頁
- (37) 同書、一〇二—一〇五頁
- (38) 『不死身のジークフリート』桜井春隆訳 (ドイック民衆本の世界) 2、国書刊行会、一九八七年
- (39) Enzyklopädie des Märchens, Bd.3, 1981, S.787-820. (Drache, Drachenkampf, Drachentöter) \ 『日本昔話事典』稲

- (40) 田浩一・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編、弘文堂、平成一一(六)年、一〇一六―一〇一七頁(竜退治)
Enzyklopädie des Märchens, Bd.3, 1981, S.39-57. (Cinderella) / 『日本昔話事典』前掲書、四七二―四七三頁(シンデレラ)
- (41) 『リグ・ヴェータ賛歌』「インドラの歌」(筑摩世界文学体系9『インド・アラビア・ペルシア集』、筑摩書房、昭和六〇(四九)年)、八一〇頁 / 『インド神話』上村勝彦、東京書籍、昭和五六年、一五―一八頁
- (42) 『ギリシア神話』アポロドーロス、高津春繁訳、岩波文庫、二〇〇九(一九五九)年、三四(アポロン)、九〇―九一(クラレス)、八一―八二(ヘルセウス)頁
- (43) 註(2) *Reclams Lexikon der germanischen Mythologie und Heldensage*, S.277-283. (Thor)
- (44) *Enzyklopädie des Märchens*, Bd.3, S.794-795. (Drache)
- (45) 『黄金伝説』第二卷、ヤコプス・デ・ウォラギネ、前田敬作・山口裕訳、人文書院、一九八四年、七六―八〇頁(聖ゲオルギウス)
- (46) *Enzyklopädie des Märchens*, Bd.10, 2002, S.755-758. (Parsens)
- (47) 『蛇』吉野裕子、講談社学術文庫、二〇〇〇(一九九九)年、一四―一四二頁
- (48) 『永遠回帰の神話』エリアーデ著、堀一郎訳、未来社、一九九三(六三)年、三〇―三一頁
- (49) *Enzyklopädie des Märchens*, Bd.3, S.793, S.813.
- (50) A.a.O., S.813.
- (51) 『昔話・伝説小事典』野村純一・佐藤涼子・大島広志・常光徹編、みづうみ書房、昭和六二年、二六九頁(竜)
- (52) 『日本昔話事典』、三八九―三九〇頁(猿神退治)
- (53) 『大蛇退治』(『日本昔話大成』7、本格昔話6、関敬吾、角川書店、昭和五七(五四)年、二二八―二二九頁)
- (54) 『平凡社大百科事典』第十三卷、一九八五年、一二二―一二四頁(本地垂迹説)
- (55) *Enzyklopädie des Märchens*, Bd.10, 2002, S.1161-1164. (Polygenese)
- (56) Reclam, KHM, Bd.3, S.405.

- (57) A.a.O., S.405.
- (58) Enzyklopädie des Märchens, Bd.2, 1979, S.102-109. (Benfey, Theodor)
- (59) Enzyklopädie des Märchens, Bd.14, 2014, S.486-490. (Wandertheorie)
- (60) C.G. Jung: Der Begriff des kollektiven Unbewußten (1936)(Taschenbuchausgabe in elf Bänden, 4. Aufl., Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1993. Archetypen. Hrsg. von Lorenz Jung, S.45) / 邦訳『元型論』○・G・ユング、林道義訳、紀伊国屋書店、一九八二年、一〇頁
- (61) 『グリム童話と日本昔話―比較民話の世界』高木昌史、三弥井書店、二〇一五年、第七章「比較民話―研究の歴史」
- (62) ヴィルヘルム・グリム「古代ドイツ文学の成立とその北欧文学との関係について」谷口幸男訳(『ドイツ・ロマンス派全集』国書刊行会、一九八九年、第十五巻「グリム兄弟」所収)、三〇六頁
- (63) Friedrich Schlegel Über die Sprache und Weisheit der Indier 1808 (Kritische Ausgabe, Bd.8, Verlag Ferdinand Schöningh, München/Paderborn/Wien, Thomas Verlag, Zürich, 1975, S.105-433)
- (64) 『インド神話』ウエロニカ・イオンス、酒井傳六訳、青土社、一九九一年、七〇頁
- (65) Fr. Schlegel, Über die Sprache und Weisheit der Indier, S.293.

*グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』は次のテキストを用いた。

・Brüder Grimm: Kinder-und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm, 3Bde., hrsg. von Heinz Rölleke, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1980 (Reclam, KHM)

〔付記〕本稿は、二〇一六年七月二十四日(日曜、十四時～十五時三十分)、日比谷図書文化館大ホールで開催された「日比谷カレッジ」での講演を原稿にしたものである。講演を聴講して下さった方々、また講演の際にお世話になった皆様
に心から感謝申し上げます。

(成城大学名誉教授
民俗学研究所元所員)